九工大情報工学部 設置25周年

新学科設立に意欲

九州工業大学飯塚キャンパス（飯塚市川津）は今月、情報工学部の設置から25周年を迎えた。情報化社会の中で、情報と工学が融合した新分野をリードする技術者を目指し、学部と大学院情報工学府に約2400人が在籍する。責任者の仁川純一・情報工学研究院長は西日本新聞社のインタビューに応じ「新学科設立も検討している」と述べ、キャンパスのさらなる充実に意欲を示した。これまでの歩みと今後の展望を聞いた。

（聞き手は吉田修平）

「新学科を設立したい」と語る仁川純一研究院長

仁川研究院長インタビュー

科学と地域 結ぶ架け橋に

―25周年を振り返っての印象は。

「情報工学部は1986年に設置され、国立大学の学部では唯一、『情報工学』の名を冠している。当時はまだ、コンピューターを触ったことがあるのは一部の研究者だけ。現在はインターネットのような情報技術が、ごく当たり前に私たちの生活の中にある。さらに未来の社会をリードする学生を育てるのが飯塚キャンパスだ」

「当初に比べ、学生たちが飯塚市の一員として受け入れてもらえるようになったと感じる。山笠などの祭りや催事に参加する学生も増えた。中には卒業後、飯塚で会社を起こす学生もいる。起業の場所を問わないのが情報工学の利点でもある」

―四半世紀を迎えて、組織改編などは考えているか。

「数年内に新学科を設立したい。電子情報工学科など5学科体制でやってきたが、より時代に合った学科が必要だ。例えば本年度からは、体内で消化器官を検査するカプセルの実用化に向け、飯塚病院と意見交換会を始めている。医学との連携を視野に入れた学科や、文系学生も受け入れられるような学科をつくりたい」

―近年の教育の特徴は。

「社会に出て役立つよう、学生の問題解決能力を高める取り組みを始めた。4月にはグループ討論などを行う実験教室『MILAiS（ミライズ）』を設立。大学院に8月に新設した科目『需要創発コース』では、企業の担当者とともに製品開発などにも挑戦している。最近は、学生の質が均一化の傾向にある。もっと個性や積極性が感じられてもいい」

―地域との関わりはどう考えているか。

「積極的に情報を発信していく。地域住民が科学に親しめるよう、今年から研究者と気軽に語り合える「サイエンス・カフェ」を2カ月ごとに開催している。子どもたちが『九工大に行きたい』と興味やあこがれを抱くような、より魅力ある大学にしたい」

◇　◇

九工大情報工学部は11月19日午後1時から、飯塚キャンパスで25周年記念式典を開く。元日立社長で日本情報処理学会会長の古川一夫氏が講演し、祝賀会もある。